巻頭言

後藤乾一先生に最初にお目にかかったのは，今から四半世紀も前のこと，筆者がまだ大学院生の頃であった。アジア政経学会の大会を早稲田大学において開催するため，後藤先生と筆者の指導教授が世話役を務められることになり，そのお手伝いに加わった。その当時に後藤先生から受けた，筋の通った真摯な研究者であられると同時にてきぱきと学会開催のような実務をこなされるという印象は，アジア太平洋研究科で一緒に働かせていただくようになっても変わらない。

後藤先生は 1965 年に早稲田大学政治経済学部を卒業後，アジア経済研究所に入所され，インドネシア研究を志された。その後 1973 年から早稲田大学社会科学研究所，1998 年から同大学院アジア太平洋研究科において教育と研究に従事されてきた。この間に後藤先生が生み出された学問的業績は，インドネシア研究，日本・東南アジア関係，知識人の群像など多岐にわたる。

それら多くのご研究を貫く問題意識は，後藤先生が書かれた下記の一説に伺われるように思う。

> 1970 年代に入り，日本経済の急激かつ過度の進出に対する警戒が戦時期の過酷な日本支配の記憶とも重なりインドネシア，タイを中心に東南アジア各地で大規模な反日運動が展開されたことは，今なおわれわれの記憶に新しい。このような現実に直面し，日本の東南アジア研究者の間では，両者間の摩擦をたんなる一過性の経済紛争とみるのではなく，近代日本の東南アジア観，同地域との関わりといった文化的かつ歴史的な文脈の中でとらえるべきとの見方が広く共有されるに至った。（『近代日本と東南アジア』350 頁）

社会科学の研究者は時代に鋭敏でなければならず，時としてその「時代が放つ問題意識」に生涯を通じて取り組む。

この日本と東南アジアとの関係性について，「文化的かつ歴史的文脈」から考察するという問題意識を学問として結実させるため，後藤先生は三つの方針を提示されている。

第一は，「一次史・資料，基礎文献を重視した実証研究」であり，関係者からの聞き取り調査も積極的に活用する。第二は，「戦後東南アジアのナショナリズムの高揚と日本の戦時支配との間に一定の相関性を認めつつも，それは日本側が意図したものではなく，本質的には各地域の民族主義運動の主体性に起因する」という視点を堅持する，そして，第三は，「東南アジアに対する加害認識を欠落させてきた戦後日本人の歴史認識への批判である」と記されている。

このように明快な問題意識と堅実な研究方針から多くの優れた業績が生み出され，先生の業績は日本のみならず，国際的にも高い評価を得てきた。スタンフォード大学のピーター・ドゥース（Peter Duus）教授 が *Tensions of Empire* の書評に記したように，後藤先生の著作は東南アジア諸国が日本に対して抱く複雑な思いを描いているのである。この *Tensions of Empire* は大隈記念学術褒賞を受賞している。

また後藤先生は，研究のみならず大学行政にもその有能な手腕をいかんなく発揮され，その最たるものが，大学院アジア太平洋研究科の設立である。早稲田大学最初の独立大学院としてアジア太平洋研究科は 1997 年に創設されたが，その母体は後藤先生が当時所属されていた社会科学研究所であった。後藤先生は，1989 年には社会科学研究所の新構想として「アジア太平洋地域研究の進展を目指して」という報告書を作成され，95 年から「地域研究および経営分野を対象とする研究教育体制懇談会」に参加された後，アジア太平洋研究科設立準備委員会の委員を務められたが，この間，学内では大きな論争があったと聞いている。設立直後も 1998 年 4 月 1 日から 2000 年 9 月 15 日まで，初代研究科長の重責を果たされた。この間のご苦労のほどは計り知れない。

むろん教育においても後藤先生は優秀な学生を育てられ，多くの学生が博士号や修士号を得て学窓を巣立ち，各国のいろいろな分野で活躍している。後藤先生のご指導のもとで書かれた博士論文の中には，著作として権威ある賞を受賞したものもあり，これも後藤先生の卓越した指導力の賜物であろう。後藤先生のお人柄が築かれた人的ネットワークも広く厚く，そのおかげを以てアジア太平洋研究科に原口記念アジア研究基金も設立されたのである。また，従軍慰安婦への補償のために設立されたアジア女性基金や国際文化会館の活動にも関わられ，学者としての社会的貢献に尽くされてきた。

同僚としての後藤先生は，寛容であられると同時に，その行為をもって後に続く者の範となられた。学生を連れての研修旅行で，韓国へご一緒した楽しい思い出も記憶に新しい。

アジア太平洋研究科のロゴマークには，早稲田のシンボルである稲穂が描かれている。後藤先生が熱意と労苦を注がれたアジア太平洋研究科がさらに実るように，我々は努力と研鑽に励む所存であるが，先生には後輩としての我々を今後とも見守っていただければ幸いである。後藤先生のこれまでの早稲田大学およびアジア太平洋研究科へのご貢献を深く感謝するとともに，先生のますますのご多幸とご健勝を，アジア太平洋研究科教職員・関係者一同心からお祈りさせていただく。

後藤先生，ほんとうにどうもありがとうございました。

2013 年 2 月

アジア太平洋研究科長
篠原初枝